

独立行政法人 国立国語研究所

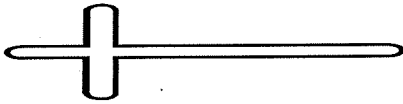
第27回「ことば」フォーラム

共催：北海道大学留学生センター

伝え合いの言葉

—コミュニケーションの意味—

平成17年9月18日（日）北海道大学学術交流会館・講堂



1時30分～

言葉で人とかがわり合う

熊谷 智子（国立国語研究所）

伝え合うということ—留学生の場合—

柳町 智治（北海道大学留学生センター）

違いを知る、違いをたのしむ

—言葉を通して関係性をつむぐために— 岡本能里子（東京国際大学）

休憩 <30分>

3時15分～

パネルディスカッション

コメンテーター

小林 ミナ（北海道大学留学生センター）

杉戸 清樹（国立国語研究所長）

<4時30分終了予定>

☆ 質問は、同封の「質問票」に記入して、休憩時に係に渡してください。

☆ ロビーで、刊行物の展示と販売をおこなっています。

☆ お帰りの際、同封の「アンケート」（黄色の用紙）に御協力ください。

言葉で人とかかわり合う

熊谷 智子 (国立国語研究所)

1. はじめに

毎日の暮らしの中で、私たちは様々な形で言葉を使っています。家族や友人と話をしたり、仕事や勉強をする上でも、新聞やテレビ、インターネットなどから情報を得る上でも、言葉を話し、聞き、書き、読むという活動は、重要な役割を果たしています。

ここでは、そうした様々な活動の中でも、言葉でコミュニケーションをすることによって、私たちが周りの人々とどのようにかかわり合っているのか、より良いかかわり合いとはどのようなものかを考えていく上で、いくつかの話題を提供したいと思います。

2. 言葉による人へのはたらきかけ

人とコミュニケーションをするとき、私たちは言葉でどんなことをしているのでしょうか。まず、相手に何らかの情報を伝えるということが考えられます。それは、「明日の会議は3時に始まる」という事実の伝達であったり、「あなたに会えてうれしい」という気持ちの表出であったりします。

言葉で人を動かそうとすることもあります。依頼をしたり指示を出したりするのは、相手の行動を促すことです。また、何かを説得することで、相手の意思や考え方が変わるといこともあります。これらは、相手の実際の行動や考えに影響を与えるはたらきかけといえるでしょう。

もう一つ、忘れてならないのは、人間関係をつくったり、維持したりするという言葉のはたらきです。自己紹介をしたり、「よろしくお願ひします」と挨拶するなど、その最たる例かもしれません。また、近所の人と「毎日、よく降りますねえ」「ほんとにねえ」と、道で立ち話をするのも、「言葉をかかわすこと」自体に意味のある、互いの関係の確認のようなものといえます。

こうした言葉によるいろいろなはたらきかけを通して、私たちは毎日ほかの人々と一緒に何かをしたり、人間関係を作ったりしてかかわり合いながら、社会生活を送っています。

3. 目的を果たすこと、関係を保つこと

言葉で人にはたらきかけるというのは、誰もが日常的にやっているとはいえ、ときには、かなりの工夫が必要な場合もあります。少し具体的な例を考えてみましょう。

まず、人に頼みごとをするようなときはどうでしょうか。何かを頼むからには、なんとか「うん」と言ってもらいたいというのが人情ですから、何度もお願いしたり、なだめた

りすかしたりするかもしれません。しかし、一方で、それは相手に手間や負担をかけることとなりますから、あまりに「とにかくお願い」調でいくと、「自分の都合ばかり言っている」と相手が気分を害してしまう恐れもあります。そうならないためには、「忙しいときにほんとに悪いんだけど」と恐縮の気持ちを表したり、どうしてもこのお願いをする必要がある事情を説明するなどして、相手の理解を得ることも、とても重要です。

苦情を言ったり注意をしたりする場合も同様です。伝える内容は、相手にとっては快いものではないでしょうから、相手の気持ちにも配慮した言い方が必要です。かと言って、遠慮のあまり言葉を濁してばかりいて、言いたいことがきちんと伝わらないようでも困ります。要は、両方のバランスをどううまくとるかということです。

これらの例からも分かるように、人にはたらしかけるときには、目的を効果的に達成することと、相手の気持ちやお互いの人間関係を大事にする事の両方に気を配ることが大切です。言葉を使う上でも、声の調子や表情、物腰なども併せて、その両方のバランスをとる方向での工夫がなされると、より円滑なコミュニケーションができるのではないのでしょうか。

4. 集団づくりの言葉

ここで、人と人との関係に関連することとして、集団と言葉について考えて見ましょう。

私たちはみな、複数の集団に属しています。家族も一種の集団です。学校や職場、趣味のサークル、あるいは若者世代や〇〇県出身など、人の行動範囲や年齢・性別、生得的なものまで、集団は様々な要因によって成り立つことが考えられます。

多くの場合、集団のメンバーは仲間内の言葉を持っています。それは、その集団に長く伝えられている言葉であったり、同じ集団で一緒に何かをするうちに自然にでき上がってきた言葉であったりもします。その集団に属さない人は聞いたこともない単語もあれば、一般的な単語でも仲間内でだけ通じる特別な意味がある、ということもあります。専門用語や隠語などがその好例ですが、そのほかにも、職場の仲間だけで通じる誰かのあだ名や、共通の経験を持っている友達どうしでだけ通じる話題などもまた、広い意味での集団の言葉に含めることができるでしょう。

そうした言葉は、その集団のメンバーの結束や親しさを確認したり強めたりすることに役立ちます。集団内では、その言葉を使うことで、ほかの一般的な言葉では通じないようなニュアンスが出せたり、効率的に内容が伝えられたりもします。

しかし、その一方で、その言葉はその集団に属する人と属さない人とを隔てる、目に見えない壁にもなり得ます。例えば、三人で会話をしている場合を考えてみましょう。そのうちの二人が、その二人の間だけで通じる言葉遣いや話題で話したとしたら、どうでしょうか。その二人は互いの共通性や近しさを確認し合うことになるかもしれませんが、もう一人は取り残された気持ちになるのではないのでしょうか。同じ言葉が、共通点を持つ人たちを結びつけると同時に、共通点を持たない人を疎外する、という場合もあるのです。

5. 多様性とコミュニケーション

自分と共通点を多く持つ相手とのコミュニケーションは、比較的容易です。何をどう言えばいいか、相手はどんな風に受け取りそうか、想像がつきやすいからです。しかし、人は一様ではありませんし、地球的規模で人の移動が活発に行われる今日では、言語や文化を異にする人々と日常的に出会う機会も増えています。

自分と異なる相手に出会ったとき、どんなことが起こるでしょうか。オストハイダ・テーヤさんという人が行った調査をもとに、一つの例を見てみましょう。その調査では、下肢が不自由なために車椅子を使っている、言葉によるコミュニケーションにはまったく支障がない人たちにインタビューを行いました。その結果、次のようなことが分かったそうです。車椅子の人が、もう一人の車椅子を使っていない人と連れ立っているとき、例えば駅でエレベーターの場所を駅員さんに尋ねたとします。「エレベーターはどこですか？」と尋ねたのは車椅子の人なのに、駅の人はいずれの人に向かって答えることがあるということです。車椅子の人は、自分が無視されたような気がするに違いありません。

さらに、これと同じことは外国人や高齢者に対しても起こる、とテーヤさんは指摘しています。例えば、外国人（特に、一目で外国人と分かる人）と日本人が二人で歩いていて、外国人がきちんと日本語で道を聞いても、相手の通りがかりの人は日本人の連れの方に向かって答えることが少なくないそうです。

こうした場合、駅の人も通りがかりの人、別に車椅子使用者や外国人を無視しようとか、やりとりから疎外しようとかいう意図はないのだと思います。ただ、そうした人々と話した経験が少なければ、どのように話せばいいか、心もとない気はするかもしれません。そのため、無意識のうちに、話しやすい相手を選んで答えてしまうのではないのでしょうか。

現代社会でのコミュニケーションで私たちが経験する多様性は、人の多様性に限られません。コミュニケーションのメディアもまた、多様化の一途をたどっています。最近の例として、パソコンの電子メールや携帯メールがあげられます。

新しいメディアであるメールの場合、どのような言い方（書き方）をすればいいか、迷うことは少なくありません。手紙のような一定の「型」が確立されていない上に、話し言葉でもあり、書き言葉でもあるような、複合的な性格を持っているからです。実際、メールの文面の改まり方や、絵文字を使うかなどは人によって異なります。ときには同じ人の間でも、仕事の話か私的な話かで、メールの「口調」が変わることがあります。

いろいろなやり方がある（＝なんでもあり）という状況は、自由ではありますが、その一方で、よく知らない相手に対してどのように語りかけたらいいか、迷ってしまうということも当然起こってきます。

6. 豊かな「伝え合いの言葉」に向けて

多様な相手に対して、多様な言葉遣い、多様なはたらきかけ方があり得る状況で、それではどうしたらいいのでしょうか。分からない相手は避けるのでしょうか。それとも、「こ

れが私のやり方！」と、断固押し通すのでしょうか。

人とのコミュニケーションは、常に問題なく進むものではありません。同じ物を指して、年配の人は「ズボン」、若い人は「パンツ」と言うなど、日本人どうしても言葉の誤解が起こり得ます。敬語を使わないことを、ある人は「親しみの表現」と考え、ある人は「失礼」と感じて、意図しない誤解や摩擦が起こることもあります。

そうだとすれば、戸惑いや誤解はしょせん起こるものと考えて、それをどのように見つけ出し、解決を探っていくかが大切なのではないでしょうか。そうした行動やプロセスこそが、「コミュニケーション」であり「伝え合い」なのだと思います。

そこでまず重要なのは、想像力です。自分はこういうつもりで言ったけれど、相手の反応から、どうも意図どおりには伝わらなかったらしい。では、相手の立場に立ってみると、自分の言葉はどんな風に聞こえるだろう？と、思いをめぐらせる想像力です。

もう一つ必要なのは、柔軟性でしょう。言葉の使い方でも、コミュニケーションの仕方でも、自分のやり方だけが唯一のものだと思わないことが大切だと思います。これは、頭では分かるのですが、意外に難しいことでもあります。

こうした想像力と柔軟性をお互いに持つことができれば、何か問題が起こっても、少なくとも「よく分からないけど、話が通じなくて嫌な感じ」という印象で終ったりはせずすむかと思えます。最初からうまくいくという構図よりも、やりとりを通して少しずつ歩み寄り、お互いにとってより心地よい、言葉でのかかわり合い方を双方から模索していくという形が、理想なのではないかと思えます。

人は、社会生活の中で、人と言葉を通して様々な形で協力し合い、気持ちを伝え合い、心の安らぎも得ています。この基本線は、人やメディアなど、コミュニケーションを囲む諸々の要因がどんなに多様になっても、おそらく変わることはないでしょう。そして、想像力と柔軟性で一歩ずつコミュニケーションを作り上げていくという姿勢があれば、多様性は混乱のもとではなく、楽しむべき豊かさにつながっていくのではないのでしょうか。

参考文献

国立国語研究所 (2005) 新「ことば」シリーズ 18『伝え合いの言葉』国立印刷局

第27回「ことば」フォーラム

伝え合うということ

—留学生の場合—

柳町 智治

北海道大学留学生センター

2005年9月18日

1. 北海道大学の留学生

1-1 留学生数

- ・在籍者769人(北大全体の4.3%)
- ・521人が大学院生や研究生(大学院生全体の8.6%)

1-2 日本語の学習

- ・留学生センターの日本語コース
(例)「日本語研修コース」→
大学院進学前の初級日本語教育。
15週間、計450時間の集中コース。

2. 日本語教室の「ウチ」と「ソト」

留学生S君の場合

日本語の教室での評価 ⇔ 大学院研究室での評価
 ウチ ソト

- ・S君はなぜ「ソト」ではうまくいったのか？
- ・「ウチ」と「ソト」のどこが違うのか？
- ・非母語話者＝大事な場面では、意外とうまくコミュニケーションできることがわかっている。

3. 「ウチ」の会話

黒田：あのう、ウエップさん、京都に行くんですって。
 マイケル：ええ、大阪の出張の場りに、よるつもりなんです。
 黒田：ちよっと、おねがいしてもいいかしら。
 マイケル：ええ、何ですか。
 黒田：京都の「やつし」というおかしを買って来て
 もらいたいの。うちの母がだいすきなの上。
 マイケル：ああ、いいですよ。



日本語教科書の会話例



ある会話テストの様子

：『Japanese for everyone』Nagara S, et al. (1990) gakken (学研)
 p.211 (), p.106 () Illustrations:Andy BOERGER
 :『みんなの日本語 初級 本冊』(1998)スリーエーネットワークp.101

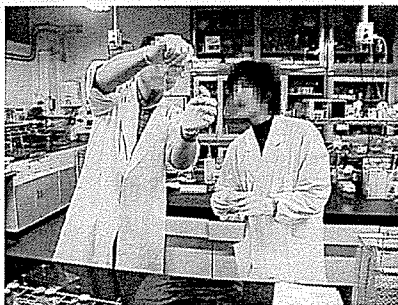
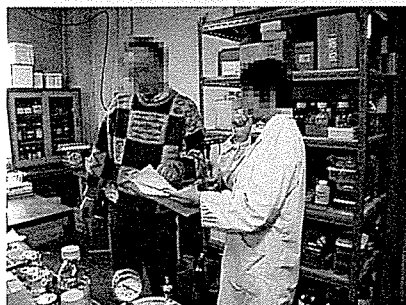
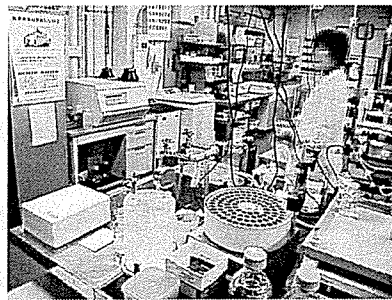
4. 「ソト」の会話—大学院理系研究室での調査

4-1 留学生Aさん

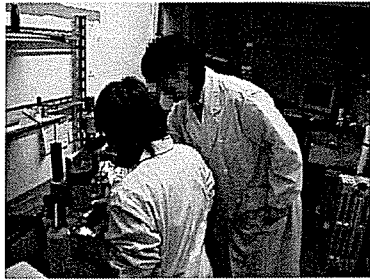
- ・東アジア出身。来日3年め。
- ・専攻は分子生物学(修士課程)

4-2 理系研究室という場所

- ・モノが多い!(人工物)
- ・手や体が常に動いている!(活動)



研究室での会話場面例

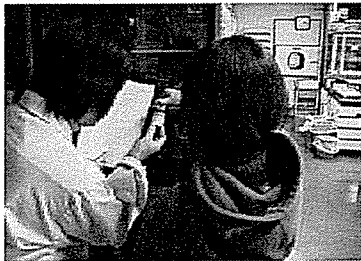


研究室での会話場面例

理系研究室の会話は...

- ・研究(実験)という活動の中に埋め込まれている
- ・モノ(人工物)を介している場合がほとんど
- ・指差しの動作が多い
- ・現場指示(特に「コ」系)が多い

発話だけで会話が成り立っているわけではない。
人工物、非言語要素、空間的移動、などと絡み合っ
ている。



ウチ
と
ソト



5.「ウチ」と「ソト」の会話のデザイン

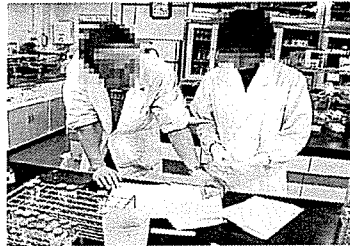
会話のデザインのされ方

◇ コミュニティーによって異なる

5-1 理系研究室とはどんなコミュニティーか

- ・手先の器用さ、観察眼が大事
- ・実験・研究を行う実践的な能力が問われる

◇ 「サランラップ」の例



「サランラップ」の例 ◇ 「ワザを盗め！」

B先生：

「(Aさんが)どの程度こちらの話がわかっているのか、私には把握できないことがある。」

「言ったはずなのに、実験の手順を間違えることがある。」

- ・「文法」や「発音」ではなく、実験を一人で再現できる「実践的能力」が問われている。◇ 「評価」の対象
- ・言語はその一部を構成している。

5-2 「教室」とはどんなコミュニティーか？

あるフランス語入門クラスの例

教師: あなたは英国人ですか？

学生: はい、私は英語が話せます。

- ・「知識」を試し試されるためのコミュニケーションが行われている。
そのように会話がデザインされている。
- ・「ネイティブスピーカー並みの能力」が目標
- ・「能力」を個人に帰属させる発想

6 留学生にとっての「伝え合い」

- ・「伝え合い」は、発話だけでなく、モノ、非言語要素、空間的移動、などと絡み合っている。
- ・「伝え合い」は、その場の実践と切り離せない。
例) 実験室、教室、...
- ・大事なものは、コミュニティーの有能な一員であることを示せるかどうか。

違いを知る、違いをたのしむ

— 言葉を通して関係性をつむぐために —

岡本能里子（東京国際大学）

2005年9月18日（日）
第27回「ことば」フォーラム

I 「21世紀を生きぬくため」の 日本語表現能力への注目(1)

- 国内：多文化社会到来
 - ・ 2003年留学生 10万人計画達成
 - ・ 外国人登録者、小中高外国籍児童生徒
在籍者数の増加
- 国外：グローバル化
 - ・ 情報化
 - ・ 価値観の多元化

I 「21世紀を生きぬくため」の 日本語表現能力への注目(2)

- 1 学習指導要領における
日本語表現能力への注目(H元年～)
- 2 「国語に関する世論調査」(H15年)
言葉遣いへの高い関心
- 3 読解力低下：PISA学力テスト結果
- 4 空前の日本語ブーム
「声に出して…」 「問題な…」

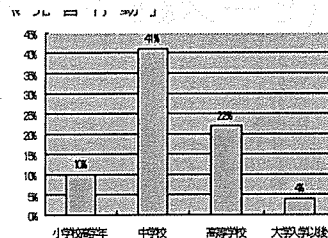
II 「伝え合う力」と 「コミュニケーション能力」

「英語が使える日本人」育成のための
行動計画 (2002年)

- 国語教育：「正しく美しい日本語」
- 英語教育：「自分の主張を持ちそれを明確に
伝えるためのコミュニケーション能力」

III 現在日本社会の コミュニケーション事情 (1)

- 1 学校現場で-1
- 1) 学ぶ意味の喪失



III 現在日本社会の コミュニケーション事情 (2)

- 3) 学校現場で-2
- 「先生の考えに沿う意見でなければ権威をふりかざして生徒の発言を封じ込める」
 - 「教師から名前を呼び捨てされる」
「敬語を使えと指導されるのに教師は生徒に「です／ます」さえ使わない」
(吉岡 2002)

Ⅲ 現在日本社会の コミュニケーション事情(3)

2) 男女で

『話を聞かない男、地図が読めない女』

(ピース&ピース 2000)

『わかり合えない理由』

(タネン 1992)

Ⅲ 現在日本社会の コミュニケーション事情(4)

3) 家庭で

「子どもの気持ちが

わかりにくい」：59.4%

(朝日新聞 2003)

4) 病院で

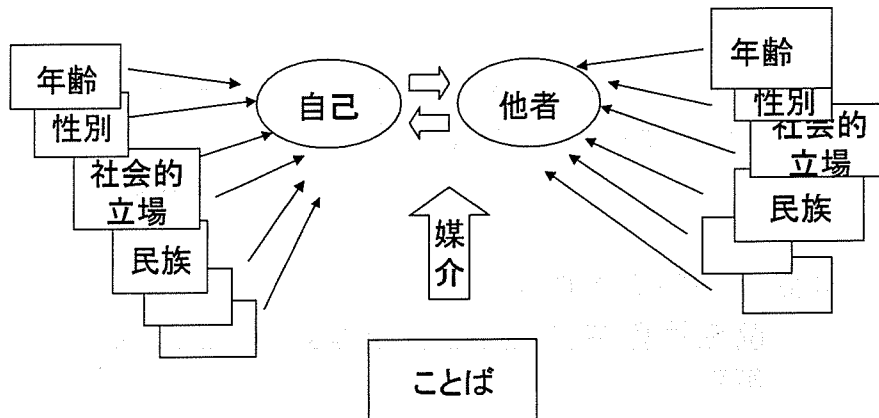
「おじいちゃんお注射しましょうね」

↑

「子供扱いされている 名前を呼んでほしい」
(宇佐美 2002)

IV 日本社会の異文化性

複数の自己／多様な位置取り



V 問題の所在(1)



- 1 「声」の喪失
「言っても意味ない」「話すことない」「別に...」
- 2 関わり合いの放棄
「関係ない」

V 問題の所在(2)

3 コミュニケーションの「フレーム」の違い

フレーム：相手との関係や発話の場面がどのようなものかをとらえる枠組み

(ベイトソン 1990)

◎話し手のことばは

聞き手のコミュニケーションのフレームで
解釈される

V 問題の所在(3)

4 「やさしい権力」

「自明すぎること」の認識の難しさ

5 「正解」に潜む「暴力」

「さくら草が〇〇ています」

VI ことばの力を育む実践から

- 1 英語と日本語の授業連携
ステレオタイプを壊す
「個人として」かかわる
- 2 小学校のコミュニケーション学習
キレずに、攻撃せずに、自己主張

VII 新たな「伝え合い」のための コミュニケーション能力とは(1)

1 違いを知る

他者のフレームの認識→
自己のフレームの認識

他者を知る→自己を知る

VII 新たな「伝え合い」のための コミュニケーション能力とは(2)

2 違いを楽しむ

ズラシを入れる＝フレームをずらす

- ・ 「なあんちやって！」と言える遊び心
- ・ ウィット／ユーモア／社会風刺
例：スターリンジョークを産み出す力
- ・ 楽しさ志向 ・ 多様な解釈の可能性
- ・ 想像力／創造力

☆若者ことば／絵文字などにつながる志向性

「絵文字の隣に並べるとかわいいかな、と思って」

VII 新たな「伝え合い」のための コミュニケーション能力とは(3)

3 「摩擦やせめぎ合い」を通して

他者の「声」の獲得を保証する

4 自己の「声」をもつ

5 協働で新たなコミュニケーションの 場、コミュニケーションのルールを 創出する

Ⅷ 今後の「伝え合い」に向けて

1 ことばの学びとは

異質の他者と共生、共育し新たなことばや意味を創り出す社会実践である

2 ことばの力を育むために

すべては「さくら草が〇〇〇〇います」から始まる
正解ではなくそれぞれの文化の「間」に立つ心の
余裕と想像力／創造力／デザイン力

<参考文献>

- ピーズ・アラン&バーバラ・ピーズ 2000『話を聞けない男 地図が読めない
女—男脳・女脳が「謎」を解く—』(藤井留美訳)主婦の友社
朝日新聞「子どもたちはどこにいる? 攻撃しない、黙らない」
2003年7月25日
- 甲斐陸朗 2002「言葉をみつめる・国語を考える」『日本語学』4月臨時増刊号
Vol.21. pp.6-11 明治書院
- 加藤哲夫 2002 『市民の日本語—NPOの可能性とコミュニケーション』
ひつじ書房
- 野山広 1998 「国語教育と日本語教育との連携の可能性—多文化教育の視点
から—」大平浩哉退官記念論文集編集委員会編 『21世紀をひらく国語
の教育』 pp.23-40. 愛育社
- 大平浩哉 1998「はじめに」大平浩哉退官記念論文集編集委員会編
『21世紀をひらく国語の教育』 pp.23-40. 愛育社
- 高木光太郎 2002「文化の間で生まれる学びの可能性」 森敏昭編著 21世
紀の認知心理学を創る会著『認知心理学者 新しい学びを知る』 pp.184-193.
北大路書房
- タネン・デボラ 1992『わかりあえない理由—男と女が傷つけあわないための
口のきき方10章—』(田丸美寿々 訳) 講談社
- 當眞千賀子 2002「コミュニケーションを育むとは」『日本語学』
4月臨時増刊号 Vol.21. pp.12.-19 明治書院
- 宇佐見まゆみ 2002「対人コミュニケーションの諸問題」
『多言語・多文化共生社会における言語問題』 pp.63-75 国立国語研究所
- 吉岡泰夫 2002「ポライトネス・ストラテジーに関する諸問題」
『多言語・多文化共生社会における言語問題』 pp.77-88. 国立国語研究所